

李馮の“聯網四重奏文学賞”授賞作について

——「唐朝」「紀念」「蝴蝶」「拉薩」——

鷲巢 益美

ここ数年来、中国の文学界では若手作家たちのことを“新生代作家”あるいは“晩生代作家”と呼んでいる。主として六十年代に生まれ、九十年代に入ってから本格的な創作活動を行うようになった、ということが基準のひとつのようだ。一九六八年二月生まれで九三年にデビューした李馮は、そのうちの一人に数えられる作家である。

李馮の本名は李勁松、広西壮族自治区南寧市に生まれた。八四年に飛び級で南京大学(分析化学専攻)に入学、翌年中国文学専攻に移る。創作談「我的写作」(『湖南文学』九八年二期)によれば、両親の意向で分析化学科に入学したものの緻密な実験が性に合わなかったこと、文学にも興味があったことなどがその理由だという。文学部の課程が必ずしも作家を養成するためのものではない、ということはおそらく当たり前のことにも思えるが、南京大学も御多分にもれず、李馮は無味乾燥な文学概論などの授業を聞きながら居眠りばかりしていたという。学内で文学社を結成した熱心な文学愛好者たちを横目に、現在は作家や評論家となっている朱文、呉晨駿、賀奕らと語り合ったり遊んだりしていたらしい。

南京大学の大学院に進学し、九二年に中国古典文学(明・清時代)で文学修士の学位を修得、規定に従って農村へ“鍛錬”に行ったというのがどこで何をしていたのかは不明。その後、両親の働く広西大学で三年間中国文学を教え、九六年に辞職し専業作家となった。九七年より二年契約で広西文学院招聘専業作家となる。現在は、大学の同級生で弁護士の妻・嚴静と北京に住んでいる。

小説を書き始めたのは九二年。『北京文学』九三年八期に初めて、短篇小説「另一种声音(もうひとつの声)」が掲載された。これまでに四十編余りの作品を発表し、単行本も何冊か出ているようだ。

さて“新生代”もしくは“晩生代”と呼ばれることについて、李馮自身は、作品の内容や作家の生年・生い立ちを考慮せず、単に年代で区切ったに過ぎないこのような呼称は曖昧なものだとして異議をとなえている。「‘文革后一代’作家的写作方式」(『上海文学』九八年五期、邱華棟との対談)や「新生代作家走访记(节选)」(『作家』九八年十二期、東北師範大学中文系教員の張鈞によるインタビュー)などによれば、この世代に共通するのは文化大革命の明瞭な記憶や政治的背景を持たないことだ、という点を根拠とし、“文革後一代”と呼ぶのがふさわしいというのが彼の主張である。

李馮の作品の特徴のひとつは、歴史や古典文学や民間伝承をたびたび作品の中に取り入

れるということだ。実在のものあり架空のものあり、よく知られた人物をひっぱりだし、ある程度は史実をなぞりつつ話を作りかえたり、ひとつの作品のなかで複数の題材を取り扱ったりしている。その多くは中国人はもちろん、中国に興味をもっている人ならばたいして知っているようなものである。中国の歴史や文学の素養があれば、まずは肩の力をぬいて気楽に読めるのではないかと思う。話の中身もちろんおもしろいのだが、まずは設定で読者を引きつけようというのだろうか。その一方で、現代を描いた作品も同じくらいの本数を書いている。

言い換えれば、李馮が作品の背景として設定している時代には、書物や伝聞によって知るよりほかはない時代・何となく見たような気はする、おぼろげな記憶はあるのだがそれを確認するには他者に頼らなければならない時代・実際に自分の眼で確かめることのできる時代の三種類があり、史実や伝説・伝聞を交えながら、春秋戦国時代から現代に至るまでの“さまざまな時代”を描いているのである。

これまでに発表された作品に登場する固有名詞を幾つか挙げると、実在するものに孔子、荘子、李白、阿部仲麻呂、三蔵法師、徐志摩、盧隱、文化大革命などがある。これらの隙間を埋めるように、伝説や古典文学からは牽牛、梁山伯と祝英台、荘子の蝴蝶、西遊記、水滸伝、媽祖などが取り上げられている。両者をひっくるめて考えると、時代は多岐にわたっている。李馮の描く“現代”もこれらと同様にひとつの“時代”であり、彼は過去と現在を分け隔てなく描いていると考えられないだろうか。

個々の作品を見ると、ひとつの作品がひとつの時代の枠に収まらないということが多々見受けられる。例をいくつか挙げてみよう。「另一种声音」は孫悟空のその後という形で話が始まるが、時代は流転し最終的には現代で終わる。「牛郎」(『山花』九七年一期)、「祝」(『作家』九八年一期)に登場するのは現代の牽牛、梁山伯と祝英台である。「唐朝」(『鍾山』九七年二期)では、練丹術に使われる薬品の成分が現代使用されている化学記号でも表記される。その他の作中で度々顔を出す作者自身は、現代そのものである。こういった点から見ても、過ぎ去った時代はどのような時代であろうが“小説の題材としての一連の過去”なのだ、と李馮は捉えているのではあるまいか。

史実だろうが虚構だろうが、過去に起こった出来事として伝えられるものの中から、中国人が共有する記憶としてより多くの人々の頭に残っているであろう題材を選び、共有する記憶をなぞりながら少しずつ視線をずらし、新たな問題を投げかけているように思われてならないのである。

* * * * *

一九九五年より、『作家』、『山花』(以上月刊)、『大家』、『鍾山』(以上隔月刊)の四誌に、新人作家の発掘を目的とする“聯網四重奏”(ネットワーク・カルテット)という欄が設け

られた。この欄を創設するにあたっての同年一月付の編者の言葉が、『山花』五期などに掲載されている。これら四誌の同月に発行する号に、同一作家の異なる作品を一挙掲載するというもので、年に四～六回行われ、九九年四月までに斯好、述平、張旻、朱文、徐坤、刁斗、東西、張梅、邱華棟、文浪、魯羊、李馮、丁天、夏商、陳家橋、王海玲、李洱、李大衛、劉慶、畢飛宇、吳晨駿、衛慧、金仁順の順で計二十三名が登場した。『作家報』九八年五月十六日号によると、今後は陶純、朱輝、葉弥、謝挺、胡性能が登場する予定で、この欄はこれまでに“文壇において多方面にわたり良い影響を生じ、とりわけ青年作家の注目と人気を広く集めており”“今年下半期には第三回『聯網四重奏』文学賞を選出すると同時に、『聯網四重奏』作家作品集を出版する予定”であるという。九七年十一月からはこの『作家報』（週刊）も加わって創作談などを掲載していたが、同紙は九八年十二月をもって停刊してしまつたと聞く。

* * * * *

“聯網四重奏”に李馮が登場したのは九七年春、その後第一回“聯網四重奏文学賞”を授賞している。作品名と掲載誌は次のとおり、[]内は訳題。

「唐朝」[唐王朝]（中篇）『鍾山』二期
「紀念」[記念]（中篇）『大家』二期
「拉薩」[ラサ]（短篇）『作家』三期
「蝴蝶」[胡蝶]（短篇）『山花』三期

時代背景は「唐朝」が唐代、「紀念」が一九二〇年代、「拉薩」と「蝴蝶」が現代となっているので、前述した“さまざまな時代”がほぼ出揃つたと言える。欲を言わせてもらえば、“おぼろげな記憶のある時代”、具体的に言うと文化大革命の頃を描いた作品が入っていれば、よりバランスのとれた作品群となつただろう。これらの作品の主題について李馮は、東北師範大学の張鈞によるインタビュー「迷失中的追寻」（『花城』九八年三期）で、次のように答えている。

張鈞：「唐朝」の主題は追跡と消失（原文“追寻与迷失”）で、これは「孔子」（筆者注：李馮の長編小説のタイトル）の主題と似ています。実際、あなたの他の多くの小説にも共通する主題です。あなたは作品を変えて、違った側面とレベルからこの主題に接近し、繰り返しているのです。

李馮：「唐朝」、「紀念」、「拉薩」、「蝴蝶」、四作品はどれもその主題に従っています。でも聯網四重奏がなければ。たぶんこんなふうを書くことはなかったでしょう。聯網四重奏は重要な点では差し障りのない、ささやかな文学の試みなので、これに関わっているときにはゲームをしているような楽しさがありました。

“追跡と消失”とは逃げ水を追いかけるようなことなのだろう。四編の作品について言えば、遙か彼方に、実体は不明だが興味を引きつけるものが見え隠れし、それが幻かもしれないとわかっていながら追わずにはいられない。実体のないものに躍らされるとわかっていても躍らざるをえず、逆らってじっとしていても何の進展も得られない。運よく何かを手にすることができたとしても、それを掴んだ時点で代償を払ったり喪失感を味わったりする羽目になるのだ。

主題のほかに四作品に共通しているのが三人の登場人物、李敬(男性)と曼倩(女性)という二人の若者、そして詩人である。

李敬と曼倩は近くにいながら永遠に結ばれそうもない二人として登場する。時代背景は唐代から現代にまでわたっているが、李敬と曼倩は転生を繰り返しても一緒にはなれない因縁がある、というわけではない。さまざまな人間関係をさまざまな時代や状況に割り当てて描き、結局人間のやることに変わりはないと暗に言っているのであろう。

詩人の名は作品によって変わる。「唐朝」の李白と「紀念」の徐志摩は言うまでもなく実在の人物で、李敬が敬意を払う対象として描かれる。「拉薩」に登場するのは“自称”詩人であり実際に詩を書いているのかどうかは不明、ラサへ行きたいという李敬に現地の人間を紹介する。「蝴蝶」ではアルバイトでテレビドラマの脚本も書く詩人で、ディレクターの李敬とは仕事を通しての知り合いらしい。各作品での詩人の役柄の共通点は、李敬の夢の手助けをすると見せかけて実は混乱に陥れているということである。このことから、李馮が作中人物に感情移入しているとしたら、その対象は詩人だろうと考えられる。どの作品にも、読者に対する“はぐらかし”や“話題のすり替え”が感じられるからである。

ここで各作品のあらすじを紹介しておく。

「唐朝」は、折衝都尉という役職を父親から引き継いだばかりの李敬が、皇帝(おそらく玄宗)の命を受けた道士に連れられ、遙か東海に浮かぶという仙山を目指す物語。道中、賊に襲われた貴族の母子を助け、その娘・曼倩に李敬は一目惚れ、彼女たちの護衛をつとめながら都を目指す留学生の阿部仲麻呂と知り合う。その後、詩人の李白が一行に加わり李敬と道士のよい話し相手となるが、仙丹の完成を目前にして李白は姿を消す。海辺にたどり着き海上に浮かぶ仙山(実は蜃気楼)を目撃、あと一歩というところで、仙山まで飛んでゆくために必要な仙丹が、李敬の愛犬に呑み込まれてしまう。犬は空高く舞い上がり姿を消す。今は仙山に暮らしているという貴妃(おそらく楊貴妃で、皇帝の夢枕に立ち近況を告げたことになっている)の身柄を確認し、証拠の品を持ち帰るとというのが旅の目的だったが、道士が言うには貴妃が身につけていた簪と小箱はすでに墓泥棒から高い値段で買ってあるので、このまま帰っても褒美がもらえるとのこと。だが李敬はわけがわからなくなって道士と別れる。とある港町で、今は晁衡と名を変え日本に戻るところだという、

かつての阿部仲麻呂と再会し曼倩の消息を聞く。このとき李敬は話の内容や晁衡の容貌から、自分ひとりだけ時間の流れ方が遅いようだとすることに気づく。日本に上陸したという噂のある貴妃の足跡を確かめるよう、晁衡が皇帝に命ぜられたと聞き、李敬はますます混乱してしまう。

「紀念」は、若くして飛行機事故でこの世を去った詩人・徐志摩の半生を軸に、彼の周囲に出没する三人の若者、李敬・曼倩・才叔の三角関係を描く。ヨーロッパに留学した才叔を曼倩が追ひ、曼倩を李敬が追う。才叔と李敬はヨーロッパのどこかで徐志摩と接触する。飛行機製造を学ぶとあって留学したはずの、金持ちの息子・才叔は、結局何もものにする事ができぬまま曼倩と結婚し帰国、経済的には豊かだが怠惰な生活を送っている。恋に破れた李敬の方が飛行機の操縦を学んで帰国、郵便機のパイロットとなる(このあたり、サン＝テグジュペリの処女作『南方郵便機』と重なって仕方がないのだが……。)。ある日、北京大学での講義のため出張する徐志摩を急遽同乗させることになる。かねてから彼のファンだった李敬は気もそぞろ、霧が出ていたという悪条件も重なって山に激突してしまう。あと数センチ上空を飛んでいれば事故は避けられたらしい。李敬の遺品となった徐志摩の詩集が、後輩のパイロットを経て曼倩の手に渡る。夫が自堕落な生活を送っているせいもあり、曼倩は李敬と一緒になればよかったのではないかと思う。

「拉薩」は、勤め人(職種不明)の李敬が突然ラサへ旅行することを思い立つが、準備を進めるうちに雲行きが怪しくなり、ラサ行きを取りやめてしまうという話。李敬は友人の“自称”詩人から、ラサの雑誌者に勤めるK女史を紹介してもらう。何度か手紙をやりとりしているうちに、K女史が“あなたのことは曼倩から聞いている”と書いてきたことで李敬は不審を抱く。恋人の曼倩とは毎日会っていて、K女史の言った時期に彼女がチベットへ行ったはずなどない。K女史が知っている曼倩と李敬とは、いったい誰なんだ？考え込んでいたある日、李敬はふと、自分がラサそのものに対する興味を失っていることに気づく。

「蝴蝶」は、チェロキーに乗って移動中の詩人が、ディレクターの李敬から恋人・曼倩との顛末を一方的にまくしたてられ、いささか閉口するという話。李敬は、自分が製作に携わったテレビドラマに出演した曼倩とつきあうようになった。父から習ったという魔術を操り、蝶を飛ばせて見せる曼倩に李敬は惹かれたのだった。ある日ロケ先にいた曼倩から李敬に、故郷で兄弟の結婚式に出てほしい、そこで落ち合おうという連絡が入る。汽車やバスをいくつも乗り継ぎ、やっとの思いで到着したのは不思議な村だった。式が終わっても曼倩は現れず、仕事に戻った李敬はやがて自分が振られたことを知る。

* * * * *

先ほど引用したインタビューのなかで、李馮自身が“ゲーム感覚で”“楽しんで”書いたと答えているが、四編とも眉間に皺を寄せることなく読める作品となっており、誰が読

んでもまずは娯楽作品として楽しめることと思う。小説である以上はどこかに“嘘”があるのは当然のことなのだが、本当にそうだったのだろうか？と思って読み進めているうちに作者自身が顔を出し、“これは史実と違う”“こんなことを信じてはいけない”“そんなばかな！”などと御丁寧にもひとこと告げたりする。あかんべえをされた気分にもなるがさして悪意は感じられず、作者の技量なのだろうと感心したりもする。歴史的事実に題材を取っていても小説はあくまで小説なのだという、作者自身のささやかな主張と見ることもできるだろう。

“ゲーム”という言葉から筆者が連想するのは、「三国志」や「信長の野望」といった、パーソナルコンピュータ用のゲームソフトのタイトルである。聞くところによれば、こういったゲームにおいてはプレイヤーの意向や技量次第で、史実とは違う方向に話が進んでゆーくらしい。コンピュータの画面上で画像処理されつつ進んでゆくような物語を、紙に印刷された文字という、別の形式で読まされているような気分にもなってくるのである。

李馮の作品を読んでいて全体的に感じられるのは、魔術や夢や宗教といった形のないもの、眼には見えない不思議な力を突き詰めようとする作者の姿勢である。時としていかがわしさを伴うが、それらをきっかけとして人々が行動を起こすのは確かなのである。時代が変わり、科学技術がどんなに進歩しようとも、理屈で説明のできないことは依然として発生するのである。得体の知れない“何か”をきっかけとしてさまざまな事件が起こり、原因不明な点も多々残したまま、ひとつの物語は終息へと向かうのだ。

“聯網四重奏文学賞”授賞作ではどんなことが起こっているかというところ……皇帝が見た夢がもとで貴妃捜しの旅に出た李敬、その李敬自身も、夢に現れた曼倩が靴を片方残していくという不思議な体験(?)をする。“仙丹”は本当に効果があるのか？はるばるヨーロッパよりキリスト教の伝導に来たはずなのに酒場で飲んだくれる西洋人。失恋はしたものの、空を飛ぶという夢を叶えた李敬はあこがれの詩人と遭遇、だが飛行機は墜落し、遺品の詩集はめぐりめぐって昔の片思いの相手に渡る。魔術を操る曼倩に惹かれて付き合い始めた李敬だったが、曼倩は最後まで謎めいた存在のまま姿を消す。思い起こせばラサへ行きたくなってきたきっかけは、曼倩と街を歩いているときにたまたま聴いた流行歌だったような気もする……。

結局は“神のみぞ知る”ということにでもなるのだろうか。だがその神でさえ、たとえば「俎」(『山花』九七年十一期、拙訳は「神の座」という訳題で『季刊中国現代小説』(蒼蒼社)第Ⅱ卷第十二号(一九九九年夏)に収録)という短篇では、結局は人間によって造られた、ある種のいかがわしさを伴った存在として描かれてしまうのである。

“目には見えない何らかの力”の他に、微々たるものかもしれないが、かつて中国大陸に乗り込んできた外国人や外国産の物をあざ笑うような態度も処処に見受けられる。

“聯網四重奏文学賞” 授賞作品からいくつか拾ってみよう。

ネストリウス派キリスト教の伝導士は、酒場で暴れる得体の知れないろくでなしとして描かれる。彼らの消息はその後途絶えるが、逆に中国で生まれた錬丹術はヨーロッパに伝わり錬金術となって残ったと言い誇る。日本から期待を背負って留学したはずの阿部仲麻呂、のちの晁衡は貴族の従者として登場し、やがて中国式の名を与えられ、中国皇帝から怪しげな命令を受けて一時帰国の途につくことにされてしまう。便利なのだがいまひとつ頼りない一九二〇年代の飛行機は、操縦ミスが直接の原因とはいえ墜落し、著名な詩人をひとり殺してしまう。

こういったことを織りませた理由を作者に尋ねたなら、興味があることや面白そうなことを思いつくままストーリーに織りませてもらって、という答えが返ってくるにすぎないのかもしれない。好意的に見れば、他者に呑み込まれたりするものかという自信や、元気の良さに満ちて溢れているということになるだろう。だが意地悪な見方をすれば、傲慢さの片鱗とも受けとめられるのである。

* * * * *

李馮のこれまでの作品の特徴を手短に言えば、そのエンターテインメント性で読者を充分に惹きつけ楽しませつつ、ふっと我に返らせるような仕掛けが所々に巧妙に挟み込まれている、ということになるだろう。

最近の李馮は執筆活動をするだけでなく、同年代の作家たちと何やらプロジェクトを試みているようである。今後の活躍を見守りたい。

〈付〉 **李馮作品目録** (未定稿) *は二次的資料によるもの。

【小説】 (短) = 短篇、(中) = 中篇、(長) = 長編

另一种声音(短)	《北京文学》1993-8
自我麻烦(短)	《作品》1993-9
多米诺女孩(短)	《花城》1994-5
阿光坐在沙发上(短)	《花城》1994-5
我作为英雄武松的生活片段(短)	《花城》1994-5
招魂术(短)	《收穫》1994-6
庐隐之死(中)	《收穫》1995-1
在海边(短)	《江南》1995-1
我的朋友曾见(短)	《人民文学》1995-11
感冒(短)	《人民文学》1995-11

秘密旅行(短)	《作品》1995-12
倒霉蛋马海皮及其他(中)	《山花》1995-12
辛秀秀(中)	《江南》1996-1
地铁(短)	《作家》1996-2
探望(短)	《作家》1996-2
中国故事(短)	《山花》1996-4
十六世纪的卖油郎(短)	《人民文学》1996-5
最后的爱(短)	《人民文学》1996-5
孔子(長)	《花城》1996-4
王朗和苏小眉(中)	《收穫》1996-5
消失(短)	《瀛江》1996-6*
墙(短)	《長江文芸》1996-12
牛郎(短)	《山花》1997-1
纪念(中)	《大家》1997-2
唐朝(中)	《鍾山》1997-2
蝴蝶(短)	《山花》1997-3
拉萨(短)	《作家》1997-3
温吉儿(中)	《江南》1997-3
天堂里的车票(短)	《北京文学》1997-7
刺槐树下(短)	《北京文学》1997-7
碎爸爸(中)	《人民文学》1997-11
俎(短)	《山花》1997-11
祝(短)	《作家》1998-1
梁(短)	《瀛江》1998-1*
七五年(中)	《小說家》1998-1
审判(中)	《山花》1998-2
回故乡之路(短)	《青年文学》1998-2*
如愿以偿：第三章(リレー小説)	《人民文学》1998-3 [注]
辛未庄(短)	《花城》1998-5
采访(短)	《作家》1998-6
二十万(短)	《山花》1998-10
一周半(短)	《山花》1999-1
在天上(短)	《作家》1999-2

圣徒传(短)	《時代文学》 1999-3 *
七短章(短)	《作家》 1999-4
在锻炼地	*
过江	*

[注]《北京文学》は一九九八年一期より“小説連環”という欄を設け、「如愿以償」というタイトルのリレー小説を、一年かけて十二人の若手作家によって完成させることを試みた。六期までに李大衛、邱華棟、李馮、丁天、李洱、刁斗の順で登場したが、七期で突然姿を消した。“開始宣言”こそ立派だったが、計画倒れだったのだろう。内容的にも評価すべき点はないと思われる。

【創作談など】

创作谈	《花城》 1994-5
前与后	《作家》 1996-2
也说晚生代	《山花》 1997-11
晚生代的十五分钟	《南方文壇》 1997-5
我的写作	《湖南文学》 1998-2
辞职与写作	《山花》 1999-1
写作与资源	《上海文学》 1999-4

【インタビュー・対談など】

迷失中的追寻—李冯访谈录(张钧)	《花城》 1998-3
作家影集	《作家》 1998-6
“文革后一代”作家的写作方式(李冯/邱华栋)	《上海文学》 1998-5
录音带：文本与声音(李冯：整理)	《作家》 1998-8
新生代作家走访日记(张钧)	《作家》 1998-12
母本的衍声：作家实验室之一(李修文/张生/海力洪、李冯)	《作家》 1999-1
日常生活：对话之二(李大卫/李洱/李冯/李敬泽/邱华栋)	《山花》 1999-2
个人写作与宏大叙事：对话之一(李大卫/李冯/李洱/李敬泽/邱华栋)	《作家》 1999-3
手持文本将你打：作家实验室之二(李大卫、李冯)	《作家》 1999-3

【単行本】

《庐隐之死》	海天出版社(深圳) 1996年 *
《中国故事》	中国廣播電視出版社 1997年

多米诺女孩／招魂术／中国故事／十六世纪的卖油郎／最后的爱／地铁／
探望／我的朋友曾见／王朗和苏小眉／在锻炼地／蝴蝶／牛郎

《碎爸爸》 长春人民出版社 1998 年
《孔子》 海南人民出版社*
《孔子》 河南文芸出版社*
《十六世纪的卖油郎》 河南文芸出版社*

【新聞記事】

在历史与现实中漫游的“行者”——访青年作家：李冯 《文学報》1997-7-24
李冯的传奇 《作家報》1998-2-5
未完成的俄底浦斯 《作家報》1998-2-12

【評論】

朱伟「编后絮语」 《花城》1994-5
李洁非「窺」 《人民文学》1995-11
李振声「“文本寄生虫”李冯和他的长篇《孔子》」 《当代作家評論》1997-6
徐肖楠「李冯的戏仿小说」 《作家》1997-7

【邦訳】

「ドミノ・ガール」〔原題：多米諾女孩〕
飯塚 容訳 『季刊中国現代小説』第Ⅱ卷第9号(1998年秋)
「神の座」〔原題：俎〕
鷺巢 益美訳 『季刊中国現代小説』第Ⅱ卷第12号(1999年夏)

【邦文資料】

「現代に蘇る『西遊記』：李馮のパロディー小説『もう一つの音』」
飯塚 容 『ユリイカ』1998 September
「北京で会った作家たち(下)李馮印象記」
大西 紀 『東方』216号(1999年2月)